

「被爆の実相のオンライン化・デジタル化」事業の今後

林田 光弘

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館からの受託研究事業(2021-2023年度)として「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業を実施している。今年度は2021-2022年度に集めた資料や作成した教材を普及・活用することに重点を置き取り組みを行った。

学校での活用としては被爆前の日常を伝える授業を小学校3校、中・高校各1校、大学3校4回、合計9回実施した。参加した生徒からは、『最初は、戦争前の日常は、今と違うと思っていたけど、写真などを見たら同じと気づいた(長崎市内小学生)』、『被爆前の日常を知ることを通して、奪われてきたものの大きさ、人が生きるという上での原爆の位置づけがより鮮明になったと感じた(長崎大学学生)』などの感想が寄せられた。まだ分析は必要であるものの、被爆前の日常を通じて当時を生きる人々や被爆者と自分を重ねる生徒は多く、これまで若い世代への伝承において課題とされていた被爆体験への「共感」や「自分ごと化」の対策として一定の有効性が見られた。

授業以外の展開としては、タブレットを用いた航空写真アーカイブ閲覧しながらの平和公園周辺をめぐるフィールドワークの実施や、平和案内人等を対象にした資料・教材活用の講習会の実施など普及・活用に取り組んだ。こうした一連の取り組みは特に原爆忌周辺の7~8月にかけて、全国報道や特集番組・記事等で多数扱われた。

追加コンテンツとしては、2022年度から作成しているスライ



平和学習の様子
(2023年6月23日, 写真提供:長崎市立市野母崎小学校)

ド教材を3本作成。航空写真アーカイブは広島版の作成に加えて、長崎版の航空写真上に被爆前後のスチール写真をピンで配置し、アーカイブ化するマップも作成した。また、海外向けコンテンツとして被爆者手帳友の会が11月に行なった被爆者によるアメリカツアーに被爆前の日常を含む長崎原爆被害の概要をまとめた英語の動画を作成・提供し、ツアー期間中15箇所上映された。その他この3年間の成果物やホームページの英訳作業も進んでおり、2023年度内公開予定である。

(はやしだ みつひろ、RECNA特任研究員)

大きく育ちつつあるJ-PAND:朝長万左男先生のインタビューを交えて

山口 響

RECNAが編集にあたりテイラー & フランシス社よりオンラインで刊行されている学術誌Journal for Peace and Nuclear Disarmament(J-PAND、和名『平和と核軍縮』)は2017年12月に創刊され、今年で早7年目を迎える。

年間2回と、その発行頻度は高くないものの、オンラインですぐ論文が刊行できる気軽さも手伝ってか、創刊以来の発行記事総数はすでに225本(2024年3月中旬時点)に到達している。このところは、質としては玉石混交であるものの、(依頼論文でない)自由投稿論文の数も増えてきている。

また、読み手の側からすると、購読契約なしにオープンアクセスで論文を読めることは大きな利点である。購読契約メインの学術誌に掲載された論文の閲覧数が二桁、三桁であるものが少なくない中で、J-PANDでは四桁、五桁に達する論文も少なくない。

中でも群を抜いているのが朝長万左男客員教授が2019年に執筆した“The Atomic Bombings of Hiroshima and Nagasaki: A Summary of the Human Consequences, 1945-2018, and Lessons for Homo sapiens to End the Nuclear Weapon Age”である。2024年3月13日時点で、閲覧数は

10万3936回にも及ぶ。このように多数のアクセスがあることについて朝長先生の見解を伺ってみたところ、原爆の人体影響のサマリーとしたタイトルが効いているのだらうと推定している、ということであった。原爆投下100年目を迎える場合にどのようなサマリーを追加するかを考えようとしているということで、原爆後障害研究のさらなる深化と相まって、朝長先生の今後のご考究が待たれるところである。また、先生のご論考に対して出されている質問で「原爆の後障害でこれまで何人が亡くなったか」というものがあるそうだが、これはなかなか結論の出ない難しい問題だということであった。

さて、J-PANDIに話を戻すと、閲覧数が多いのはいいとして、問題は読まれ方の質である。先ごろJ-PANDIにもようやく「ジャーナル・インパクト・ファクター」が付与されたが(2022年



J-PAND ウェブサイト: 朝長万左男客員教授執筆論文の閲覧数

の数値は「0.7」)、読まれている割には、有益な論文として引用される頻度がまだまだ低いとも私個人は感じている。今後とも掲載論文の質の向上に努力してゆきたい。

(やまぐち ひびき、J-PAND編集長補佐)



朝長万左男客員教授執筆論文表紙

2023年度の市民講座と特別市民セミナー

河合 公明

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)が主催し長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)が共催する核兵器廃絶市民講座が、「核兵器のない世界をめざして」をテーマに開催された。長崎原爆資料館で4回、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で1回、合計5回開催された市民講座には、延べ581名の参加者があった。

2023年4月22日(土)の第1回では、「G7広島サミットを前に」をテーマに、吉田彦彦RECNAセンター長、西田充長崎大学多文化社会学部教授、金崎由美中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター長が登壇。広島で開催されたG7サミットにおける核兵器の問題をめぐる注目点や、メディアや市民の役割について議論した。

7月15日(土)の第2回では、「平和教育における被爆地の役割 サービス・ラーニングを通した大学生の学び」をテーマにした西村幹子国際基督教大学(ICU)教授が基調報告。その後、ICU から学生の相澤陽香さんと久世実子さん、ナガサキ・ユース代表団から梶立人さんがディスカッションに加わり、平和教育について被爆地の役割について意見交換を行った。

9月16日(土)の第3回では、「核兵器禁止条約の現状と課

題」をテーマに、中村桂子RECNA准教授と河合公明RECNA教授が登壇。核兵器不拡散条約(NPT)と核兵器禁止条約(TPNW)をめぐる、それぞれの意義と課題について考え、被爆国である日本、被爆地である長崎、市民が果たすべき役割について議論した。

11月11日(土)の第4回では、「被爆地からの報道の未来」をテーマに、長崎国際テレビの加藤小夜報道記者とジャーナリストの佐々木亮氏が登壇。変化する時代の中で長崎の持つメッセージの意味は何か、それをどのように発信していくかをめぐり、報道に携わる経験を交えつつ議論した。

上映会&討論「私たちと被爆者」と題して開催された2024年2月10日(土)の第5回目では、第1部では映画「長崎の郵便配達」の上映会を行い、第2部では映画をめぐるパネルディスカッションを行った。第2部では、川瀬美香監督、林田光弘RECNA特任研究員、長崎大学院教育研究科1年生でナガサキ・ユース代表団第11・12期生の平林千奈満さんが登壇。フリーアナウンサーの前田真里さんによる進行で、「被爆者とのこれからの過ごし方」をテーマに議論を行った。

2024年2月23日(金/祝)には、特別市民セミナー「サッカーを通して考える平和」が開催された。講師を務めた高田

春奈WE LEAGUEチェアは、国際社会における女子サッカーの現状や日本におけるWE LEAGUEのビジョンと取り組みを説明し、スポーツをめぐるジェンダーと平和の問題について参加



第5回核兵器廃絶市民講座の様子
(2024年2月10日 長崎原爆資料館ホール 撮影:PCU-NC)

者と議論した。

(かわい きみあき RECNA副センター長)



特別市民セミナーで講演する高田春奈氏
(2024年2月23日 長崎原爆資料館ホール 撮影:PCU-NC)

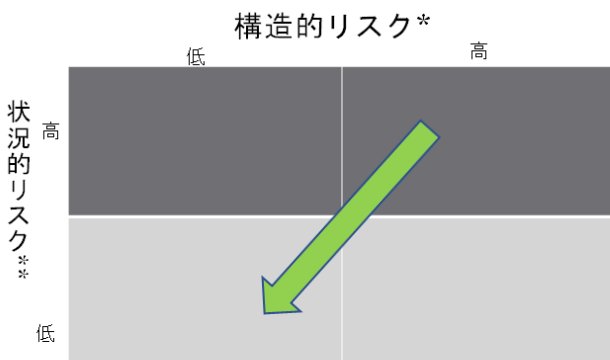
「北東アジアにおける核使用リスクの削減 (NU-NEA)」プロジェクトを総括して

鈴木 達治郎

RECNAは、2021年度より、ノーチラス研究所及び核軍縮・不拡散のためのアジア太平洋リーダーシップ・ネットワーク (APLN)と「[北東アジアにおける核使用リスクの削減: 二度と核兵器が使われないために](#)」(NU-NEA)と題する3年間の共同研究プロジェクトを開始した。目的は、この地域で核兵器が二度と使われないようにするための政策提言を行うことであり、そのために1年目(2021年度)は、どのような状況下であれば核兵器が使われるようになるのか、25の事例を発表した。2年目(2022年度)は、1年目で取り上げた25事例に加え、ロシアの事例を5つ追加して合計30事例の中から、5つの事例を取り上げ、核兵器使用の影響を定量的に評価した(「[ニュースレター](#)」Vol. 11, No. 2, March 2023, p. 3にて紹介)。

そして、3年目(2023年度)は、1, 2年目の成果を踏まえ、核兵器使用のリスク削減への具体的、現実的な政策提言をまとめて最終報告書「[核の惨事を防ぐための政策: 何をすべきなのか?](#)」を3月末に発表した。3年目では、核兵器使用リスクの構造を、「[構造的リスク](#)」と「[状況的リスク](#)」に分類し、図にある右上のボックスから左下のボックスにリスクを削減する政策提言を提示した。

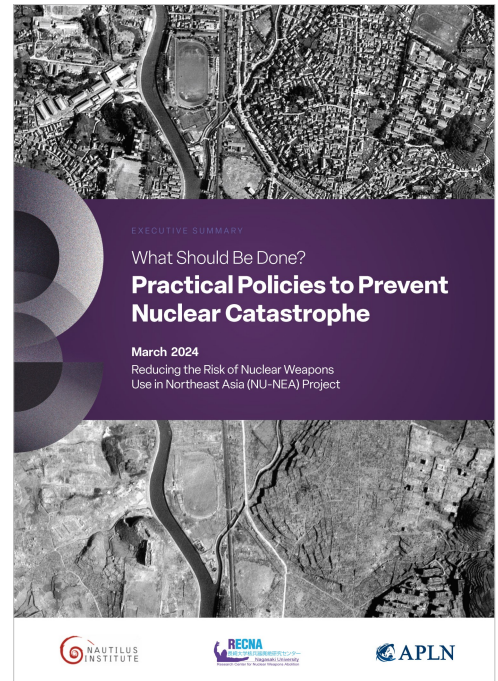
図 核兵器使用リスクの構造図



* 構造的リスク: 政策志向, 例. 核戦略, ドクトリン, 軍縮政策
** 状況的リスク: アクター志向, 例. 戦略対話, 軍事演習, 批判応酬

また、提言内容を4つの大きな分野(透明性、予見性、戦略的共感、抑止と保証のバランス)に分けたうえで、さらに具体的な政策を3段階(準備、成熟、相互改革)にわけて、整理した。また、提言毎に、地域の各政府(米国・中国・韓国・北朝鮮・日本)がそれぞれ取りうる政策を明示した。4月後半に、成果報告の公開シンポジウムを開催する予定である。

(すずき たつじろう, RECNA副センター長)



成果報告書表紙

長崎大学のグローバル巨大リスク管理に関する研究プロジェクトの招待で来崎したストックホルム国際平和研究所(SIPRI)のダン・スミス所長を2024年3月11日にRECNAに招き、ラウンドテーブル(教員との非公式な意見交換)を行った。ロシアのウクライナ侵略で核兵器使用リスクが高まった一方で、核問題に多くの国や人々の関心が強まったこと／地政学的競争が進む米中の間では、核先行不使用宣言などについての協議が緊張関係の緩和に貢献すること／北大西洋条約(NATO)での米国の防衛義務に消極的な発言を繰り返してきたドナルド・トランプ氏が共和党の大統領候補になる公算が大きくなったことへの欧州内での懸念など、幅広いトピックについて約1時間、率直に語り合った。

(よしだ ふみひこ、RECNAセンター長)

RECNA研究会:米国・ロシアの核専門家を招いて

専門家を招いてのRECNA研究会を今年度は2回開催した。

第1回は、2023年10月16日に、米シンクタンク「憂慮する科学者同盟(UCS)」グローバル安全保障プログラム(グレゴリー・

カラーキーRECNA外国人客員研究員が所属)の専門家6名を迎えて「米国の核兵器政策の進展と北東アジアへの影響」と題して開催した。米国の核兵器近代化計画やミサイル防衛、兵器用核物質の再利用の可能性、そして北朝鮮のプルトニウム生産能力、最後に米中核戦争の可能性と、広汎なトピックについて、簡潔な発表をしていただいた。その後の意見交換も活発に行われ、大変有意義な会合となった。

第2回は2024年3月12日に、国連軍縮研究所(UNIDIR)のパヴェル・ポドヴィック博士を招いて、「核兵器は過去の遺物か?—ロシア・ウクライナ戦争からの核政策への教訓」と題して開催した。ロシアの核政策や核物質の専門家であるポドヴィック博士であるが、今回は「もはや核兵器の軍事的価値はない」という視点で、現実の事例を踏まえて、1時間にわたり講演をしていただいた。オンライン形式の会議であったが、講演後の意見交換では、国際法の視点や、中国の核戦力増強、トランプ政権がもし復活したら、といった質問もでた。核抑止に依存していくほど、逆にリスクが高くなる、というある意味では自明のことではあるはずなのに、「現実的政策」として「核抑止強化」が指向されている現状を、批判的な視点で問題提起をしていただいた。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長)

ナガサキ・ユース代表団 12期生 活動開始

2023年12月6日、ナガサキ・ユース代表団の第12期生の任命式が長崎大学内で行われ、長崎大学および長崎外国語大学の学生8名が活動を開始した。第12期生は、RECNAの教員等による講義や長崎や広島でのフィールドワークを通じ、核兵器の問題について様々な角度から学び、その問題について自分なりに議論する力を養うべく励んでいる。8名は、本年7月下旬からスイスのジュネーブで開催される2026年核不拡散条約(NPT)再検討会議第2回準備委員会に派遣される予定で、そこでは核兵器廃絶へ向けた長崎からの発信を行うための活動も行うことになる。

ナガサキ・ユース代表団の第12期生は下記の通り(50名順、学年は2024年3月1日現在)。

長崎大学工学部1年 江川 航士郎(えがわ こうしろう)

こんにちは。長崎大学工学部化学物質工学コース1年の江川航士郎です。千葉県船橋市出身です。私は大学進学を機に千葉県から長崎県に来ました。好きな教科は物理と世界史

です。長崎に来て長崎出身の友達ができ、いろいろな話をしていく中で、長崎県と千葉県の平和教育の熱量があまりに違うことに驚きました。私が千葉県の学校で「平和」について考えたことは、小学校の時の道徳の授業で数時間しかないのに対し、長崎では学校現場だけではなく原爆資料館に何度も足を運び、平和について考える時間が設けられたと、友人から聞きました。私がナガサキ・ユース代表団の活動として一番実現したいことは、関東を筆頭にほとんど平和教育を受けていない中高生などに、長崎に実際に足を運んでもらい原爆資料館を見学して、感想をほかの人と共有して平和について考えるきっかけを作ることです。平和の実現のためにナガサキ・ユース代表団ができることは無限にあると思うので、様々な活動をしていきたいです。全力で取り組んでいきます。どうぞよろしくお願いたします。

長崎大学医学部1年 金子 真歩(かねこ まほ)

皆様、こんにちは。長崎大学医学部1年の金子真歩です。私は広島で生まれ育ち、大学への進学を機に長崎に来ました。小中高と広島で過ごす中で多くの戦争や原爆、平和に関

することを学んできました。しかし、高校を卒業して授業で平和学習をする機会がなくなり、私自身のなかで「もう平和学習や平和活動をするのではないだろうな」という思いを抱いていました。今までに学んできたことはたくさんあるけれどもそれらをもとに一人で新たな活動をできる自信がなかったからです。そんな中でこのナガサキ・ユース代表団の活動を知り、私自身が平和に貢献する活動をできるチャンスだという風に感じました。一個人の活動には限界がありますが、このナガサキ・ユース代表団の仲間と協力することで少しでも世界が平和に近くできるように活動したいと思っています。私はナガサキ・ユース代表団の活動の中で「伝える」ということを大切にしていきたいです。広島で育った中で受け継いだ広島の想い、長崎で学ぶ中で得た長崎の想い、これらを私なりに世界へ伝えていきたいです。1年間、よろしく願いいたします。

長崎大学大学院工学研究科1年 河邊 桜(かわべ さくら)

長崎大学大学院工学研究科1年の河邊桜です。福岡県出身で、大学進学を機に長崎に住み始めました。今まで平和学習を受けてきましたが、戦争や核の問題について自分事として捉えていませんでした。どこか遠くで、昔の話だと思っていました。しかし、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻やイスラエル・パレスチナ問題を通して、戦争や核の問題は、今起こっていることで、命の危険にさらされながら生きている人がたくさんいて、自分にも関係があり、戦争のない状態というのは、決して当たり前のことではないことに気づかされました。ナガサキ・ユース団に入ろうと思った理由は、被爆地で学ぶ学生だからこそ得られる知識や伝えられることがあり、長崎から世界に平和を発信することが、長崎の学生としての使命だと感じたからです。12期生として、平和活動へのハードルを下げるができるような活動のきっかけづくりをすると共に、自分自身も知識や考えを深めながら積極的に発信していきたいと思えます。

長崎大学多文化社会学部1年 小林 万葉(こばやし まよ)

はじめまして。長崎大学多文化社会学部1年の小林万葉と申します。私は兵庫県出身で、大学進学を機に長崎県にやって参りました。正直に言いますと、私は核兵器などの分野に関して、教科書や修学旅行の広島での平和学習で学んだこと以上の知識を持っていません。

そのため、長崎に来てからは、長崎出身の学生との核兵器に関する知識量のギャップを感じていました。また、大学で受講している「核兵器とは何か」という授業を通して、戦争や原爆がいかに恐ろしいものであるかを痛感し、核兵器について学びたい、学ばなければならないと感じました。被爆者の声を聞くことができなくなる時代を迎えつつある今、そしてパレスチナの地で戦争が行われている今、全ての人々が戦争や核兵器問題をより身近に「自分ごと」として考えられるよう、若者である私たちが被爆者の方々の意志を引き継ぎ、平和を訴えていく

必要があると感じています。ナガサキ・ユース代表団の一員として、核兵器問題について深く学び知識を身に付け、長崎県内のみならず他府県の方々、そして世界にまで平和を願う一人の大学生として声を届けたいです。

長崎外国語大学外国語学部2年 平川 彩夏(ひらかわ あやか)

平川彩夏と申します。長崎外国語大学外国語学部現代英語学科の2年生です。大学では英語と韓国語、そして教員免許状の取得を目指して教育について学んでいます。長崎生まれ長崎育ちで、長崎が大好きです！私は、ナガサキ・ユース代表団第12期生としての活動を通して、世代・国籍を問わず少しでも多くの人々に戦争の恐ろしさや核問題をより身近に感じてもらいたいと考えています。被爆地に近い山里小学校・中学校を卒業し、平和教育がとても盛んな環境で育ちました。しかし、高校・大学と進学するにつれて戦争や核問題について学び、考える機会は減っていき8月9日の平和祈念式典をテレビで見ることすら忘れてしまうほどになってしまいました。そして、大学に入学して様々な国から日本に来た留学生と話す中で、私たち日本人と外国人の核問題や戦争に対する意識の差を感じました。私たち日本人の中には、長崎・広島の大原爆投下の日、終戦の日すらうろ覚えの人がいるにも関わらず、留学生たちは核問題や戦争についてとても強い関心を示し、私たちよりも遥かに豊富な知識を持っていました。もっと多くの人に核問題や戦争の恐怖を身近に感じてほしいと思ったと共に、平和についてももっと幅広い視野で学びたいと思っていたころ、ナガサキ・ユース代表団の活動を知り、挑戦する機会を頂くことができました。連日のようにテレビで報道される紛争地域の様子を見たり、現地の人々の声を聞いたりして「かわいそう」「ひどい」と他人事のような言葉で片付けてはいないでしょうか？他人事ではない、自分にも何かできることがあるのではという疑念を自分自身に抱いたことも、私が今回の活動を決心することができた1つの大きなきっかけです。私たち12期生の活動が、誰か一人でも多くの人々の何かを始めるきっかけになると嬉しいです。外国語を学ぶ者として、幅広い視野と行動力を強みに任期を全うして参ります。よろしく願いいたします。

長崎大学大学院教育研究科1年 平林 千奈満(ひらばやし ちなみ)

みなさま、こんにちは。11期生に引き続き、12期生を務めさせていただきます。長崎大学大学院教育学研究科1年の平林千奈満と申します。長崎で生まれ育った被爆三世として、「長崎を最後の戦争被爆地」にするために、同じ志をもった仲間とともに核兵器廃絶に向けて取り組みたいと強く考え、11期生として活動させていただきました。活動を通して、「被爆地で活動する私たち若者の声に耳を傾けてくださる人がいること」

「平和を願う気持ちは同じこと」は世界中で共通していると気付き、「被爆地ナガサキのユース」が活動することが国内外で大きな意味をもつことを実感しました。同時に、「11期生の経験を生かし、長崎の若者にしかできないことを続けたい」と強く思い、12期生に挑戦させていただきました。12期生として、私はナガサキ・ユース代表団の最大の特徴と考えている「被爆地ナガサキで活動する若者」という点に立ち返り、長崎の声に耳を傾け、長崎の皆さまとともに、より一層活動を充実させていきたいと思っております。12期生の仲間とともにさらに学びを深め、一人でも多くの方々とつながり、核兵器のない世界を目指してアプローチして参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

長崎大学大学院工学研究科1年 廣瀬 貴彌子(ひろせ きみこ)

長崎大学大学院工学研究科1年の廣瀬貴彌子と申します。福岡県出身で、大学進学を機に長崎にきました。私は小学生のころ北九州で平和教育を受け、投下された原爆が北九州に投下される予定だったことを知り、衝撃を受けました。また、TEDxの参加を通して平和について考える機会を頂きました。核兵器を落とされた側としての教育を受けてきましたが、一方で落とした方も苦しい思いをしていることを知り、多角的な面で理解しようとする努力が必要だと気付かされました。こうした経験から長崎という地で平和について知見を深めたいと思い、応募しました。長崎ユース代表団の活動を通して、こ

れまでの歴史、世界の核問題について学び、学んだことや考えを共有していきたいと思います。一人でも多く、興味関心を持ってもらうことが「核廃絶」に向けた小さな一歩であり、必要不可欠なことだと考えます。この目標達成に向け、やるべきことを考えながら活動に取り組んでいきます。よろしくお願いいたします。

長崎大学工学部1年 福浦 知葉(ふくうら ともは)

みなさん、こんにちは。長崎大学工学部1年の福浦知葉です。私は福岡県出身で、大学進学を機に長崎にきました。私は、幼いころから平和や戦争が起きた背景などについて興味があったものの、なかなか自ら行動をおこすことが出来ませんでした。大学では何かに挑戦したいという思いもあった中で、長崎ユース代表団を知り、真っ先にチャレンジしてみたいと思い応募しました。大学で様々な出身の方々と関わる中で、長崎・広島出身者の平和に対する考え方が他県の出身者と大きく異なっていることに気づきました。こうした中で、この平和に対する考え方の地域差をなくしたいと考えるようになりました。私はこれを実現させるために長崎ユース代表団の活動を通して、全国の人に向けて、平和・核兵器廃絶について考える場を多く設けたいと考えています。長崎に住んでいるからこそ、被ばく者のお話を伺える機会が多く、様々な学びを得られると思います。こういった生の声を全国そして世界に向けて発信していきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。



ナガサキ・ユース代表団12期生メンバー
向って左から 平林、小林、福浦、金子、河邊、廣瀬、江川、平川

- 10月4日(水) ■長崎県立島原高等学校平和学習
講師:河合副センター長
場所: オンライン
コメンテーター:河合副センター長
場所:広島国際会議場地下2階ヒマワリ
- 10月16日(月) ■第40回RECNA研究会「米国の核兵器政策の進展と北東アジアへの影響」
講師:ローラ・グレゴ(UCSシニア・サイエンティスト兼リサーチ・ディレクター)、ディラン・スパルディング(UCSシニア・サイエンティスト)、スルギエ・パーク(UCSシニア・サイエンティスト)、ロバート・ラスト(UCS中国アナリスト)、エリン・マクドナルド(UCSアナリスト)
場所:環境科学部本館1階A-12教室+オンライン
12月30日(土) ■グローバル核政治における「不可逆性」の問題(パートI) 刊行
- 10月25日(水) ■埼玉県立大宮武蔵高等学校平和学習
講師:河合副センター長
場所:長崎大学中部講堂
2月10日(土) ■2023年度核兵器廃絶市民講座第5回(特別講座)「私たちと被爆者」
討論者:川瀬美香(「長崎の郵便配達」監督)、林田光弘RECNA特任研究員、平林千奈満ナガサキ・ユース代表団第11・12期生 長崎大学大学院生
場所:長崎原爆資料館ホール+オンライン
- 11月11日(土) ■2023年度核兵器廃絶市民講座第4回 被爆地からの報道の未来
講師:加藤小夜(長崎国際テレビ報道部記者)、佐々木亮(ジャーナリスト)
場所:長崎原爆資料館ホール+オンライン
2月18日(日) ■「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業成果報告会
報告者:林田光弘RECNA特任研究員 講師:全情報データ科学部教授、宮崎園子(フリーランスライター)、佐々木亮(フリーランスライター)
場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館地下ラウンジ
- 11月21日(火) ■第3回Future Earth 日本サミット2023「人新世における平和と生命(いのち)」
分科会3「平和と環境」
オーガナイザー:吉田センター長ほか、登壇者:河合副センター長ほか
場所:総合地球環境学研究所+オンライン
2月19日(月) ■第2回ピースキャリアアトク〜平和を「仕事」に!〜
スピーカー:田上富久 前長崎市長
場所:オンライン
- 11月30日(木) ■RECNAポリシーペーパーNo.19『Nuclear Weapon in Changing World』刊行
2月23日(金・祝) ■2023年度特別市民セミナー
サッカーを通して考える平和〜WE LEAGUEがめざす多様性社会
講師:高田春奈(WE LEAGUEチェア)
場所:長崎原爆資料館ホール+オンライン
- 12月6日(水) ■ナガサキ・ユース代表団第12期生 任命式及び記者会見
ナガサキ・ユース代表団第12期生、調 PCU-NC会長、河合副センター長ほか
場所:長崎大学事務局3階 第2会議室
3月7日(木) ■NERPS 2024 Conference
Workshop: Nuclear Risk in Northeast Asia
講師:鈴木副センター長、河合副センター長
場所:広島大学 東広島キャンパス
- 12月10日(日) ■国際シンポジウム2023「核戦争の危機と被爆地—G7広島サミットを踏まえて」
3月11日(月) ■ナガサキ・ユース代表団第12期による質問・懇談会
講師:ダン・スミスSIPRI所長
場所:RECNA1階会議室

3月11日(月) ■RECNAラウンドテーブル
講師:ダン・スミスSIPRI所長
場所:RECNA1階会議室

3月12日(火) ■第41回RECNA研究会「核兵器は過去の遺物か?—ロシア・ウクライナ戦争からの核政策への教訓」
講師:パヴェル・ポドヴィツグ博士
場所:オンライン

お知らせ

2024年度 核兵器廃絶市民講座

第1回 「プラネタリーヘルスと核廃絶—地球と人間の健康のために」

講師:春日 文子 長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
吉田 文彦 RECNAセンター長

日時:2024年5月18日(土)13:30~15:00
会場:長崎原爆資料館ホール

第2回 「進む核軍拡—核弾頭ポスターから読み解く」

講師:中村 桂子 RECNA准教授
鈴木 達治郎 RECNA教授

日時:2024年7月6日(土)13:30~15:00
会場:長崎原爆資料館ホール

※すべて入場無料、事前登録不要。

※オンライン配信も同時に行います。オンライン配信の場合は事前登録が必要です。

2024年度
核兵器廃絶市民講座
被爆80年に向けて 核兵器のない世界をめざして

- 全5回開催
- 申込不要(オンライン参加要申込)
- 受講料無料

オンライン配信
あります

1 5/18 13:30~15:00 長崎原爆資料館ホール	2 7/6 13:30~15:00 長崎原爆資料館ホール
3 10/5 13:30~15:00 長崎原爆資料館ホール	4 11/30 13:30~15:00 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

特別講座
※特別講座については時宜にかなった内容で開催予定です。
日時、会場は未定

主催 核兵器廃絶長崎連絡協議会
共催 長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA)
お問い合わせ 核兵器廃絶長崎連絡協議会事務局 TEL. 095-819-2252
〒852-8521 長崎市文政町1-14 郵政庁9F FAX. 095-819-2165
https://www.pcu-ncc.jp/citizen-seminar/2024-citizen-lecture/
長崎原爆資料館ホール、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館までのアクセス

RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第12巻2号 2024年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文政町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
Website: http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

©2024 長崎大学核兵器廃絶研究センター